

南宋湖南地域の書院研究についての展望

金 甲 鉉

はじめに

中国書院研究は早く1920年代から始まり、2000年代に入ってからその数が爆発的に増加し、2005年以降毎年200件程度の研究が発表されている¹⁾。その動向について簡単にまとめると、①多くの書院関連資料の整理による研究土台の構築、②書院の教育機能への関心が高く、特に書院の官学化についての論議が多いこと、③2000年以降、書院研究数が顕著に増加するが、その内容においては既存研究の成果を踏襲するものが多いこと、④研究分野の多様化（文学、娯楽面など）、⑤既存研究の再検討（地域社会や仏教との関係）などの特徴があるといえる。その中で現今までの書院研究は大きく2つの問題を抱えている。すなわち、第一は研究対象に関する問題、第二は扱っている史料に関する問題である。

まず、研究対象について言うと、これまでの書院研究は地域的には江南・福建、時期的には南宋後期に集中する問題を抱えている。また、いわゆる四大書院の一つと呼ばれる応天・嶽麓・白鹿洞・石鼓・崇陽書院や大規模書院に関する研究が多い。このような傾向が見られるのは、当該地域・時期における残存史料の量が他の地域・時期より多いためである。宋・元代の地方志をはじめ士大夫の文集などの記述からしても、圧倒的に「南宋後期」「江南・福建地域」の書院が多い²⁾。そのため、分析が特定地域や時期に偏っており、その結果を南宋全体の書院像として捉えることは難しい。

次いで扱っている史料に関しては、主に地方志、書院志、書院記などを中心に分析が行われており、一部に文集史料を活用している。この史料群から取り出せる情報も少なくはないが、書院創建（あるいは重修）時期の情報に限られている。その内容も書院の由来（創立意義など）、構造、教育方針程度であり、分析するには限界がある。近年は地方志や書院記に加え、文集史料を活用する研究も多くなっているが、その内容をみると、創建者個々人の教育思想に集中する傾向が強い。これらの研究は書院における多様な活動の中でも教育活動に集中して

おり、基本的に教育史の範疇を越えていない。

こうした書院研究の流れの中で、筆者は「南宋前期」「湖南地域」の書院に目を向けたいと考えている。南宋前期書院の研究は四大書院の一つと呼ばれる嶽麓書院と白鹿洞書院や朱熹関連の書院に集中しており、その数も多いとは言いがたい。しかし、書院が成立し始めた時期として、その重要性は高く、南宋書院の草創として押さえておく必要がある。南宋前期書院を論ずる際に、湖南地域はどの地域よりも重要になる。湖南は数多くの南宋書院の中で最も早期に書院が創建された地域であり、碧泉書堂（建炎4年（1130）創建）、城南書院（紹興31年（1161）創建）などの創建をはじめ、嶽麓書院の重修（乾道2年（1166）重修）が行われていた。さらに、湖南は宋代を通じて創建された書院の数が70カ所に至り、江南（224カ所）・浙江（224カ所）・福建（85カ所）に続いて4番目に位置するほど多くの書院が創建された地域である³⁾。しかし、湖南書院に関する研究は数少なく、特定書院、特に嶽麓書院と石鼓書院に研究が集中する傾向が強く見られる。

本稿では南宋前期の湖南書院について分析するにあたり、前もって湖南書院研究を整理し、それを基に今後の研究展望について述べていきたい。

1. 先行研究の回顧

湖南地域における書院研究は多くが清代・近代に集中しており、教育史の一環として教育制度、教育思想などに着目している研究が多い。また、現代教育との関連性や現代大学史の一環としての叙述が主となっている。南宋時代の湖南書院に関する研究は基本的にこのような流れの中で検討されるが、他の時代より思想に関する論議が多い。その中でも四大書院の一つと言われる嶽麓書院や石鼓書院へと関心が集中しており、それ以外の書院に関する研究は数少ない。これらの研究をまとめると、大

きく①思想史の観点からのアプローチ、②教育史の観点からのアプローチ、③地方文化への影響、④書院をめぐる人的関係に関する研究に分けることができる。

(1) 思想史の観点からのアプローチ

南宋時代は、数多くの儒学者によって既存の儒学に対する反省や研究が進み、いわゆる新儒学（道学・理学）が登場した時代である。同時に各地域を中心に様々な学説が表れ、討論を基にする交流を通じ、互いの学説を発展させていった。その中で、湖湘学・閩学・永康学・永嘉学など多様な学派が成立する。

湖南地域の書院について分析する際に、よく見られるのは湖湘学派の存在である。湖湘学派は現在の湖南省、その中でも湘江流域の長沙・湘潭・衡陽を中心に活動していた学派で、周敦頤を起源とし、胡安国、胡宏、張栻に代表される士人集団である。新儒学の中でも実践を特に強調し、愛国・愛民を重要視したことで特徴づけられる。

湖湘学派と書院の関係についての研究は、特に湖南大学嶽麓書院を中心に多く出されており、その中でも朱漢民氏の活躍が著しい。朱漢民氏は一体化した理学と書院の中で学派が形成していく過程について論じている。北宋時代の嶽麓書院は官学の恩恵が届かない辺境地域で官学の代わりを果たしていただいただけであったが、南宋時代になると学術的基地として働き、学派を形成し、学問趣旨を提唱していたと指摘する⁴⁾。さらに、学統の問題を書院と結び付け、湖湘学派の学問趣旨などが代々伝わったのは書院教育によることであり、先賢・先師の祠堂を設けることも祭祀と教育を繋いで学統宣揚と学術継承を図ったことであると論じている。また、湘学を地域的知識伝統と見なしており、それが持続的に発展できたのは湖南地域における書院の発展が前提となると述べている⁵⁾。これらの研究は主な題材として嶽麓書院を中心に胡安国・胡宏父子、張栻の思想がどのように伝えられたのかを究明している。

蒋建国氏は理学の伝播において湖南書院が果たした役割について論じ、湖南各地に創建された書院やそこで行われた講学によって理学の全国伝播ができたことを指摘する⁶⁾。特に嶽麓書院再建後、朱熹と張栻の会講をはじめ、活発な学術交流が行われたことを指摘し、それによって理学の伝播が促進されたと論じている。

湖湘学派の重要拠点として嶽麓書院と同じく四大書院の一つと言われる石鼓書院をあげる研究も鄧洪波・顔為両氏によって出されている⁷⁾。両氏は石鼓書院を湖湘学と書院が一体化した典型的な例の一つとみなしており、書院記の叙述から朱熹と張栻の思想が石鼓書院にも影響を及ぼしていることを指摘する。また、書院の院長である山長を中心に問答の集成や経書の解説の出版などの事

業が活発に行われ、湖湘学を広めており、宋末の戦乱中には戦争で焼かれた書院を再建し、戦争準備をするなど湖湘学の脈を保ち続けたと述べている。

(2) 教育史の観点からのアプローチ

書院研究において教育は欠かせない主題であり、すでに数多くの研究が出されている。これらの研究は教育機関としての書院が有する特性を探ることに集中し、書院組織や教育システム、教育内容などについての分析が多い。特に書院の官学化問題に着目し、官学との比較を通じ、書院の特徴を明らかにしようとする傾向がある⁸⁾。また、現代教育に示唆を与える書院の姿に着目し、その意義を導き出し、1990年代後半から2005年までの研究成果を用いて現代における意義を探るものも多く出されている⁹⁾。

湖南書院における教育史研究は、基本的に宋代書院研究の動向と一致する傾向にあるといえる。一つ特徴的なのは大多数の研究が張栻を題材にしていることである。南宋前期に限らず、上述の湖湘学派や湖南書院において張栻の影響は強い。南宋初に建てられた湖南書院は、いずれも張栻と関係している。碧泉書堂は張栻が胡宏の下で勉強していた所であり、城南書院は張栻本人が創建した所であり、嶽麓書院は重修から深く関わっていて後には講学を行っていた所である。そのため、南宋前期の湖南書院をみる際に張栻の存在は不可欠であり、思想のみならず教育面においても彼を題材とするものが多くみられる。

蔡方鹿氏は張栻が嶽麓書院の教授として在任していた時期における書院教育について論じている¹⁰⁾。張栻は書院を拠点として教学を行い、その中で教育による教化を重視し、道徳教育に努めており、教学方法においては討論を強調していたという。また、朱熹との会講を宋代書院の講学と学術交流の特徴を表す例として挙げている。さらに、こうした交流によって、湖南・四川及び全国の文化・学術教育の発展を促したと指摘する。

書院における張栻の道徳教育内容についての研究として何英旋・呂錫琛両氏の研究があげられる¹¹⁾。両氏は張栻の道徳教育について、道を伝えて民を救い、人材を育成することに目的をおき、読書し、常に討論することを通じ、知行合一することで完成できると述べている。特に、方法論として会講と討論を重視し、これは書院教育と学術研究が一体化した象徴であり、嶽麓書院を中心に全国に影響を及ぼしたと指摘する。

もう一つ、張栻が講学を行ったと知られている城南書院についての研究も若干の数ではあるが出されている。孫海林氏は張栻の略歴、城南書院の沿革、両者の関係と教育上の特徴について叙述している。嶽麓書院の教授として在任していた時期の張栻の教育思想に基づき、城南

書院における教育内容について推論する¹²⁾。

書院教育の現代教育への伝承については朱与墨・劉哲明・肖霄氏の研究があげられる¹³⁾。三氏は城南書院の現身と称する湖南第一師範学院に繋がっている張棡の教育思想について比較検討を行っている。

(3) 地方文化への影響

書院と地方社会との関係についての研究は、早くから欧米を中心に出版されている。ロバート・ハイムズ（Robert P. Hymes）氏は、南宋以降、士人の関心が中央から地方へと移動したことを強調し、書院を南宋新儒学のための地方制度の一つと見なす。その制度として書院・郷約・私倉・先賢祠の四つを挙げており、これら地方制度は国家制度に対比するもので、国家権力と家族の利益の間で自発的に組織した制度であるという¹⁴⁾。ピーター・ボル（Peter K. Bol）氏は、南宋時代に入って官職は減少したことに対し、士人の数は増加しており、官職に就くことのできない多くの士人らに代案を提示したのが新儒学であり、その中に書院があるという。書院を通じて社交活動や教育活動に務めており、ハイムズ氏と同様に書院・郷約・私倉・先賢祠を挙げ、地域社会における士人の自律的な共同体が形成したとする¹⁵⁾。このような理解は湖南書院研究においても同様に見られ、地域社会教化を中心に地方文化と書院の関係について論じる。

湖南書院が地方文化に及ぼした影響について総合的に分析した研究として、龔抗云氏があげられる¹⁶⁾。龔氏は、書院を教学・祭祀・蔵書・刻書など総合的文化機能を有する存在とし、多方面にわたって地方文化発展に影響を及ぼしたと述べている。教学においては地方文化の特色を反映しており、蔵書・刻書の場合、書院による大量の蔵書と刻書による蔵書の拡充を通じ、地方文化の発展を促進したと指摘する。また、祭祀を行うことによって学術伝統と学風を継承・発展することができるほか、地方における道德教育の見本とすることができ、地方社会での書院への関心を高めることができると述べている。

鄧洪波氏は湖南地域に書院が創建され、発展していく過程から地方文化の形成を論じている¹⁷⁾。鄧氏は湖湘文化を洞庭湖以南地区、現在の湖南省における区域性文化と定義する。北宋時代の湖湘地域は、文化的に遅れていたところであったが、四大書院の嶽麓書院、石鼓書院が発展していくことにつれ、そうしたイメージを変えることができたという。これによって学問を重視する風潮ができ、南宋に至って湖湘学派が形成すると共に湖湘文化も形成したと指摘し、湖湘学派の形成と湖湘文化の形成を同一視する。

凌飛飛氏は湖湘文化と石鼓書院の関連性についての研究を出している¹⁸⁾。凌氏は、湖湘文化の興起において石鼓書院は思想・文化・教育面の基礎をなしており、湖湘

文化形成の重要な根源であると論じている。特に宋代から清末までの歴史の中で、多くの面で思想的な共通点を有していると述べている。

(4) 書院をめぐる人的関係

士人の人的関係については数多くの研究成果が出されており、代表的なものとして朱熹の門人集団形成に関する市來津由彦氏の研究があげられる¹⁹⁾。市來氏は、朱子学は朱熹と同時代を生きていた交遊者らとの共同作業によって形成したと指摘し、朱熹と交遊者らとの関係について手紙資料までを利用し、その形成過程を論ずる。特に地域講学と広域講学による多様な学者らと交流・討論の中で学説を定立していったことを明らかにしている。

湖南書院における人的関係についての分析は主に湖湘学派と嶽麓書院を中心とする学統問題として扱われており、上述した朱漢民氏の学統研究がその類に属する。他に張棡が創建した城南書院を中心に彼の門人について考察した研究も出している²⁰⁾。朱漢民・毛晨嵐両氏は城南書院で勉学していた張棡門人について考察し、門人らを張浚・胡宏の門人の子弟、友人が推薦してきた者、張棡の親姻戚、長沙の官人や城南書院に学びに来ていた者などに区分している。人的構成面で城南書院と嶽麓書院における重複を前提としながら、城南書院を嶽麓書院とは分離させ、私塾としての性格を持つ空間であったと論じている。

2. 今後の展望 —— 同時期同地域に存在した書院の関係、士人の移動と書院

以上、現今の南宋湖南地域書院研究を①思想史の観点からのアプローチ、②教育史の観点からのアプローチ、③地方文化への影響、④書院をめぐる人的関係に関する研究、四つに分けて整理した。これらの先行研究に対し、筆者は以下のような疑問を抱いている。

湖南地域書院に関する先行研究は、思想史的観点からの分析が多く、書院と理学の関係についての研究に集中している傾向が強い。特に四大書院の一つである嶽麓書院と石鼓書院に関して研究が集中している。近年、南宋書院の特徴としてよく言われていることは、書院と理学の一体化である。こうした理解は特に教育面における分析から提唱され、学術拠点としての書院の特徴を明らかにした。しかし、研究対象が大規模書院に限られており、これをもって湖南書院全体を一般化できるのか疑問を持っている。

一般的に書院といえば、新儒学を中心に形成した私設学校として認識される。こうした理解はそのまま湖南書

院研究にも適用され、學術拠点という固定化された場所として書院の存在を捉えている。勿論、嶽麓書院などの大規模書院をみると、妥当な分析であると考えられる。しかし、他の周辺書院の場合にも適用することは難しい。そうすると、四大書院の周辺に位置する書院は如何なる存在であろうか。

こうした中で筆者が注目しているのは、同時期同地域に存在する書院の関係、士人の移動と書院の関係である。南宋前期の書院は各地で多く創建されるが、長く続く例は管見の限り、ほとんど見当たらない。湖南書院においても、四大書院の嶽麓書院と石鼓書院のほかには創建者一代で廃される。その背景としてこれまでの研究では、個人による創建が多く、体系的な管理が行われなかったためであるという。そうだとするならば、なぜ同地域に多くの書院が建てられていたのか、士人の移動と交遊関係を手がかりにその理由について探してみたい。ここでは、その展望の一つとして張栻と潭州書院の例と湖北の公安書院と南陽書院の例を紹介する。

(1) 張栻と潭州書院

靖康の変以後、金との戦争で湖北と湖南は共に甚大な打撃を受ける。戦場となった湖北地域は勿論、湖南地域まで金軍の残党が流れてきて各地を略奪していた。義軍の起こりによって次第に両湖地域での戦局は鎮まってきたが、長沙においても多くの人命被害をはじめ、嶽麓書院が焼かれるなど多大な被害を残した。このような状況ではあったが、長沙一帯は接境地として争いが続いていた湖北地域に比べ、早めに以前の姿を回復し、両湖地域経済・文化の中心地となった。当時、祖母を扶養していた張栻父子において、故郷の四川との距離も相対的に近く、安定的な地域の中、経済的に豊かで交通も便利な長沙は、生活に有利な地域であったと考えられる。

靖康の変以降、長江以南の各地では戦争後の混乱の中、反乱が引き続き起こり、全国的な人口移動が激しくなる。湖南にも多くの避難民が流れており、特に、潭州（長沙・湘潭・衡山・湘陽・湘郷一帯）、衡州（衡陽一帯）への移民が多く見られる。これら移民者は、主に戦争を避けて南に移住してきた華北（河南・山西・山東など）の士が多く、一部浙江・福建等地から反乱を避けて移住してきた士も見える。これら移民士大夫は、東北から長江を渡り、対金義軍を起こしており、避難してきた士大夫の多くがこの義軍に参加していた。その後、多くの官僚士大夫が湖南に残り、江南の士人も游学に移住してくる²¹⁾。胡安国・胡宏や張浚・張栻もこの時期を前後に長沙へ移住してくる。

張栻が胡宏の師事を受けたのは紹興31年（1161）のことで、同じ年に胡宏は亡くなるが、胡宏との出会いを前後に、張栻は胡宏門下の人々と知り合うことができた

と考えられる。胡宏との面会に当たり、胡宏は疾病のために張栻の面会を断っていた。そこで、胡宏門下の孫蒙正を介し、胡宏と連絡を取り、遂に教養を受けることができるようになる²²⁾。他に、同じ碧泉書院で学問に務めていた胡家の人士（胡憲・胡実・胡大時・胡大原・胡大本・向沈）をはじめ、李椿、曾幾、彪虎臣・彪居正、呉翌、孫蒙正、趙師孟、趙棠、方疇、向浯、蕭口、楊大異などの人物と縁を結び、後にもこの繋がりは続いていく。

これらの人物の中で潭州への移住が確認できるのは、福建の建州から来た胡家の人士ら・呉翌、開封からの向沈・趙師孟、河北からの李椿、同じ潭州湘郷から移住した彪虎臣・彪居正父子、最後に張栻まで、12人である。碧泉書院で学問に務めていた人物の2/3が他地域から移住してきた人物であり、多くの移住士人が碧泉書院を中心に集まっていたことが分かる。さらに、これらの人物の多くは嶽麓書院重建後、そこを中心に胡宏の学説を講学し、湖湘学派を築く存在となる。このことからみると、士人の移動と書院の成立に何らかの関係性があるように考えられる。

張栻が長沙を中心に生活していたのは約9年間（前期：乾道元年（1165）～乾道5年（1169）、後期：乾道7年（1171）～淳熙元年（1174））で、この人脈はその中でも長沙定住前期に形成したものであり、主に湖湘学派と分類される人々との繋がりである。張栻はこの学縁を基に朱熹、呂祖謙などと学術的な関係を広めて行く。彼は直接対面するほか手紙を用いた学術討論も盛んに行っており、その内容を嶽麓書院でも共有している。その中、一種の書院ネットワークを形成していたと考える。

今後詳細な検討が必要となるが、現段階で分かったことについて少し紹介しておきたい。張栻は手紙を用いて活発に交流しており、彼のやり取りした手紙の数は414通まで及んでいる²³⁾。手紙の往来は全体的に朱熹との交遊が圧倒的に多いが、長沙定住前期には主に胡宏家の人士と弟子らとの交流が多く、長沙定住後期には呂祖謙などの学者との学術交流が盛んであったとみえる。なお、張栻の文集に残っている344篇の詩に登場する人物からみると、主に長沙周辺の友人や四川人士との間で作られたものが多く、直接対面できる人々との関係が確認できる²⁴⁾。

こういう関係の中で書院の存在について考えると、まず師匠の胡宏が創建した碧泉書院は、主に胡宏家の家塾として利用されており、湖湘学派形成に際し、湖南に移住してきた士や長沙周辺の士が出入りしながら講学が行われていた場所であったと考えられる。

張栻が創建した城南書院は、碧泉書院と同様に張栻家の家塾として使われていたが、特に張栻の個人研究室として利用していたとみえる。張栻の著作は城南書院で執筆・改訂され、嶽麓書院での講学・討論内容を堂姪の張

煥などと整理し、既存の著作内容を補う作業を随時行っていた。交遊活動においては、個人的な社交活動や手紙を用いる遠距離交流の場として用いられたと考えられる。

城南書院が私塾として少人数が集まって研究成果を整理していた所であったのに対し、嶽麓書院は大勢の学者が集まって討論を基にする講学が行われた所であったと考えられる。張栻と湖南地域の学者らとの学术交流の中心であり、有名な朱熹・張栻の会講が行われるなど主な講学の場として使われていた。その中で張栻は湖南外部の学者との繋がりを用い、湖南の人士に多様な見解を提供する存在であったと考える。

碧泉書院の成立や城南書院の創建などは、士人の移動・移住と深く関係していると考えられる。なお、嶽麓書院を中心とする広域講学の様相も士人の移動と交流を根幹とするものである。これからの課題として、その交流像を綿密に検討し、3ヵ所の書院の関係や士人移動が書院に及ぼす影響について究明する予定である。

(2) 戦争流民の受容と書院創建

もう一つ、湖北の例ではあるが、南宋末期の湖北に建てられた公安書院と南陽書院の例を紹介する。南宋末期の湖北地域は、モンゴルとの戦争の最前線に位置し、多くの戦争流民が各地で発生し、流れてきていた地域である。特に、四川を奪われた影響で西から多くの流民が発生し、同時に湖北北側の戦場であった襄陽からも流民が多く発生し湖南との境界まで流れてきていた。このような時代を背景に創建されたのが江陵の公安書院と鄂州の南陽書院である。

公安書院と南陽書院は、淳祐2年(1242)、四川宣撫使と京湖安撫制置使を兼任していた孟珙が江陵府公安県と鄂州武昌県にそれぞれ創建したものである。これらの書院は対モンゴル戦争によって避難して流れてきた四川・襄陽の士を受け入れるために創建され、四川の士は公安書院に、襄陽の士は南陽書院に受け入れていた。なお、淳祐6年には皇帝に上奏して賜額を受ける。創建当時、公安書院で120人、南陽書院で140人の士人を育成しており、その財源として書院田などの不動産を用いている²⁵⁾。

創建者の孟珙は、生前、流民を用いた屯田の設置、活性化に力をそそぎ、それを基とする防衛システムの構築に務めていたと評される人物である。彼が書院創建を通じ、100人をも超える多くの士人らを受け入れたのもこのような政策の一環であったと考えられる。対モンゴル戦争期の石鼓書院を例にあげると、当時の石鼓書院は戦争で焼かれた書院を修復し、そこを基盤に士人らを集め、勉学と同時に地域自衛のために訓練も行っていたという。この例と合わせて考えると、最前線となった江陵などの地に書院を設け、田産まで支給しながら、学問のみに務

めさせていたとは考え難い。むしろ、防衛システム構築のために書院を利用しているとみるのが妥当に思われる。

今後詳細な検討・分析、資料収集が必要であるが、戦争による流民の受容、社会安定を目的に書院を用いる状況が見て取れる。その中には経済的な援助も含まれており、それを基盤として地域安定・地域防衛を図っていたことが分かる。なお、戦争期における士人の移動・移住の中で書院が求心点の役割を果たしていたことが推察できる。

おわりに

以上、湖南書院研究動向について整理し、これからの展望として張栻と潭州書院の例と湖北公安書院と南陽書院の例をあげて展望を述べてきた。既存の湖南書院研究は、四大書院の一つである嶽麓書院と石鼓書院に関心が集中しており、それも思想面を中心に研究が進んできた。それゆえに嶽麓書院と石鼓書院以外の書院に関する研究はほとんど進んでおらず、湖南書院の全体像をみるのが難しい。こういう問題点を打開するためには、四大書院の周辺に視野を拡げて行く必要がある。

その一つの可能性として、筆者は同時期同地域に存在した書院の関係を検討することと士人移動と書院の関係性を確認することを考えている。南宋前期の湖南潭州には碧泉書院・城南書院・嶽麓書院の3書院が共存しており、それぞれ深く関係している。これらを比較検討することで、四大書院と周辺書院の関係について究明できることが期待される。また、これらの書院は士人の移動・移住に伴って成立し、その中で多様な交遊関係を形成した。それを手紙や詩文などを用いて分析することでより広い目線から書院の姿を望むことができると考える。

士人の移動が直接書院創建の背景となる例も南宋末期の湖北公安書院と南陽書院から確認できる。書院が避難してきた士人の求心点として役割を果たした一例として興味深い。ただ、史料の数が少ないため、その詳細はまだ把握できておらず、これからの課題として検討を続けていきたい。

【注】

1. 以下の先行研究についての内容は、拙稿「宋代書院研究の現状と課題—2000年以降を中心に—」(『都市文化研究』19, 2017, pp. 50-56)に基づいている。以前の書院研究史を整理した著作としては、李弘祺「中国書院史研究—研究成果・現状と展望」(秦玲子訳、『中国—社会と文化』5, 1990)、鄧洪波「八十三年来的中国書院研究」(共著、『湖南大学学报(社会科学版)』2007年3期)「中国書院研究綜述(1923—2007)」(『東アジア文化交渉研究』別冊2, 2008)などがある。
2. 高峰煜「歴代書院若干経済問題述評」(『中国書院』1, 2005, pp. 98-110。)の「宋代書院建設状況」表によれば、両宋代に建てら

- れたとされる711ヵ所の中、江西(224)・浙江(156)・福建(85)が最も多く、全体の約3分の2を占めている。高峰煜氏の分析は、宋・元代の史料に限らず、明・清・民国までの様々な資料を基に行われたが、その概要は変わらないため、ここで引用する。
3. 書院の創建数については、陳谷嘉・鄧洪波『中国書院制度研究』(浙江教育出版社, 1997)および高峰煜「歴代書院若干経済問題述評」(『中国書院』1, 2005, pp. 98-110)を参照した。
 4. 朱漢民, 『湖湘学派与嶽麓書院』, 教育科学出版社, 1991。; 「论湖湘学派与湖南书院的相互促进和影响」, 『教育評論』1989年5期, 1989。
 5. 朱漢民, 「張栻, 嶽麓書院与湘学学統」, 『湖南科技学院学报』2014年9期, 2014。; 「書院教育与湘学學統」, 『韓國書院学报』第3号, 2015。; 「书院, 学祠与湘学学統」, 『湖南社会科学』2017年2期, 2017。
 6. 蔣建国, 「南宋时期湖南书院的创建与理学的传播」, 『現代哲学』2004年2期, 2004。
 7. 鄧洪波・顔為, 「石鼓书院: 湖湘学派的重要基地」, 『湖南大学学报(社会科学版)』第30卷2期, 2016。
 8. 代表的な研究として、陳雲怡『由官學到書院』(聯經出版事業公司, 2004), 李兵『書院教育与科舉關係研究』(臺大出版中心, 2005)があげられる。他に、閻利雅「宋代私学的特性及其社会教化功能」(『文教資料』2009年35期, 2009), 李艷婷「宋代書院研究」(『安徽文学』2014年3期, 2014), 張曉榮・葉美蘭「宋代書院發展的背景及其特性」(『南京郵電大学学报(社会科学版)』2014年3期, 2014)などがある。
 9. 関連研究として、鐘景迅「宋代書院的学术自由特色及其啓示」(『現代教育科学』2006年3期, 2006), 張世敏「從古代書院看当代中国社会」(『東洋禮學』23, 2010), キム・ビョンファン, キム・キョンソク「남송(南宋) 사대부들의 서원교육과 도덕교육적 의미 연구」(『사회과학교육』15, 2012), 宋月輝・惠愛璠・沈璋「宋代書院師生管理, 師生關係的特点及現代意義」(『揚州大学学报(高教研究版)』2010年5期, 2010), 徐慧敏, 「宋代書院經費来源及其对高校發展的啓示」(『揚州教育学院学报』2013年3期, 2013)などがある。
 10. 蔡方鹿, 「張栻与嶽麓書院」, 『社会科学研究』1991年4期, 1991。
 11. 何英旋・呂錫琛, 「張栻的书院道德教育」, 『湖湘论坛』2008年6期, 2008。
 12. 孫海林, 「張栻与城南書院研究」, 『湖南第一師範学报』2005年1期, 2005。
 13. 朱与墨・劉哲明・肖霄, 「張栻書院教育思想对湖南一師早期師範教育的影響」, 『教師教育研究』第21卷第3期, 2009。
 14. Robert P. Hymes, *Lu Chiu-yuan, Academies, and the problem of the Local Community*, Neo-Confucian Education(q.v.), 1989。
 15. Peter K. Bol, *Neo-Confucianism in History*, Harvard University Press, 2010。
 16. 龔抗云, 「論湖南書院与湖南地方文化」, 『湖南大学社会科学学报』第6卷2期, 1992。
 17. 鄧洪波, 「宋代湖南書院与湖湘文化的形成」, 『船山学刊』2005年2期, 2005。
 18. 凌飛飛, 「石鼓書院与湖湘文化的历史互动」, 『衡陽師範学院学报』第36卷2期, 2015。
 19. 市來津由彦, 『朱熹門人集团形成の研究』, 創文社, 2002。
 20. 朱漢民・毛晨嵐, 「南宋城南書院門人考」, 『大学教育科学』2017年1期, 2017。
 21. 湖南移民に関しては、葛劍雄・吳松弟・曹樹基『中国移民史(全6卷)』(福建人民出版社, 1997), 薛政超『唐宋湖南移民史研究』(中国社会科学出版社, 2015), 『湖南移民表——氏族資料所載湖南移民史料考輯』(中国戲劇出版社, 2008)などを参照している。
 22. 『宋元学案』卷42「五峰学案」初, 南軒見先生, 先生辭以疾。他日, 見孫正孺而告之。孫道五峰之言曰, 渠家好佛, 宏見他說甚。南軒方悟不見之因。于是再謁之, 語甚相契, 遂授業焉。南軒曰, 栻若非正孺, 幾乎迷路。」
 23. 手紙のやり取りについては、任仁仁・顧宏義篇『張栻師友門人往還書札彙編』(中華書局, 2018)及び、楊世文点校『張栻集』(中華書局, 2015)を基に収拾。
 24. 楊世文点校『張栻集』(中華書局, 2015)を基に収拾。
 25. 『可齋續稿』前卷5「公安竹林書院記」; 『恥堂存稿』卷4「公安南陽二書院記」。